

2009年10月15日

京都府立医大、脳の血流で認知症を早期診断 近赤外線で簡単に

京都府立医科大は14日、物忘れなどが起こる認知症の早期診断を20日から一般向けに始めると発表した。近赤外光を頭に当てて脳表面近くの血流を調べる測定装置を使い、患者の血流量の変化を調べる。発症前でも早期に発見できれば、生活習慣改善や治療に取り組み認知症進行を遅らせられると期待している。

早期診断を始めるのは京都府立医大の中川正法教授ら。近赤外線分光法と呼ぶ方法で、多数のセンサーが付いた専用器具を頭に載せるだけで簡単に血流の変化が分かる。1分間に動物や野菜の名前をできるだけ多く言ってもらい、その間の血流変化から、脳の前頭葉がどの程度活発に働いているかを判定する。

認知症では脳の神経活動の反応が遅くなり血流量の増加ペースも鈍くなるので、そうした変化をとらえる。

記憶障害の有無を調べるテストや磁気共鳴画像装置(MRI)で脳の画像を調べる検査などが普及しているが、ある程度症状が進んでいないと把握は難しく、新しい検査法を加えて総合的に診断する。週1回、1人2時間かけて診断する。費用は10万円

＝日本経済新聞 朝刊＝